

血流低下が報告されている。また、Galynker は昏迷期と ECT 治療後に脳血流を測定したが、昏迷期において left parietal and left motor cortices の血流低下、治療後では血流が改善していることを報告した。我々の結果は概ね先行論文の結果と一致しており、緊張病性昏迷と front-parietal lobe との関連が示唆された。今後、定量評価や症例数を増やした検討が望まれる。

5) UPI にみる大学生の精神健康状態と最近の傾向

森本 芳典 (新潟大学 精神医学教室)
三浦まゆみ・橘 玲子 (新潟大学 保健管理センター)

UPI (University Personality Inventory) は、質問紙を用いた自己記入式の精神健康調査票であり、大学入学時のスクリーニングテストとして最も多く利用されている。新潟大学では、1984 年から新年度入学者全員を対象に、4 月入学直後のガイダンスなどの際に、新潟大学保健管理センターが毎年施行している。今回、過去 12 年間の UPI データを用い、新潟大学新入生全体の気質的变化をまとめた。対象は、1986 年から 1992 年までの 7 年間と、1998 年に新潟大学に入学した新入生全員で平均約 2400 人。UPI 60 項目個々について、単純集計を行い、カイ二乗検定を用い 1% 以上の有意差で変化を見た。スクリーニング上重要項目とされている、4 項目、8 「自分の過去や家庭は不幸である」 25 「死にたくなる」 49 「気を失ったり、ひきつけたりする」 56 「他人に陰口を言われる」 の出現率に変化はなかった。増加項目は 5 項目、減少項目は 10 項目だった。42 「気を回しすぎる」 の減少と強い相関関係を示した項目は 45 「とりこし苦勞をする」、51 「こだわりすぎる」、52 「くり返し確かめないと苦しい」、53 「汚れが気になって困る」、60 「気持ち傷つけられやすい」 の減少と 50 「よく他人に好かれる」 の低下であり、周囲への関心や関心の持続が弱められている可能性を考えた。43 「つきあいが嫌いである」 の増加と 12 「やる気が出てこない」とは強い相関を、5 「いつもからだの調子がよい」 20 「いつも活動的である」 35 「気分が明るい」 の減少とは負の相関を示し、孤立した元気の無い学生を連想させる。自己評価の尺度として最近注目されている。「虚構点項目」は著しい低下を示し、自己肯定感が低下し自信の無い学生が増加しているとも考えられる。吐き気や頭痛、便秘などの明らかな身体症

状には変化がなかった。45 「とりこし苦勞をする」と高い相関を示す 51 「こだわりすぎる」、52 「くり返し確かめないと苦しい」 53 「汚れが気になって困る」 の低下は、神経症傾向の低下を示唆しており、はっきりした葛藤は減少し、葛藤が表面化せず、「体がだるい」に象徴されるような曖昧な不定愁訴が増えていると考えた。別の見方をすれば、ものごとにこだわらない自由な発想をもった学生の増加とも捉えられる。以上の結果から、対人関係が希薄で、元気が無く、自己評価の低い、曖昧な学生や、ものごとにこだわらない発想をもった学生の増加が近年目立ってきているという、日常臨床や大学関係者の声を裏付ける結果であると考えた。

6) 絵でする会話——交互スクリブル物語統合法を用いた不登校の症例

増澤 菜生 (新潟大学教育人間科 学部障害児教育科)
橘本 道子 (長岡赤十字病院 精神科)
鈴木由紀子 (新潟大学医学部 精神医学教室)
稲月まどか (黒川病院)
仲丸 恵 (村上ほまなす病院)
田先由紀子 (新潟信愛病院)
青山 雅子 (佐 潟 荘)
薄田 祥子 (新潟県中央児童相談所)
橘 玲子 (新潟大学 保健管理センター)

はじめに：不登校を呈する子供たちの多くは言語化が不得意であり、診察に非言語的技法が必要となる。誰でも手軽にできる非言語的技法の一つである交互スクリブル物語統合法（以下 MSSM）を用いた不登校の症例を提示し、MSSM の効用について考察した。MSSM は Mutual Scribble (Squiggle) Story Making Method の略で 1984 年に京都大学の山中康裕が考案した。MSSM は 1 枚の画用紙を 6 つに区切って、各領域に治療者（以下 Th）と患者（以下 Cl）の間に交互スクリブル（又はスクイグル）を交代で行い（最初にグルグル描きを Th が行い、投影及び絵の完成を Cl が行う。これを交代して行うため、Cl の投影が 3 回、Th の投影が 2 回となる）、6 つめの領域に 5 つの絵を使って Cl に物語を作ってもらう遊びである。

症例 H：初診時 13 歳、中 1 の女子。主訴：不登校。家族歴：母方祖父母、警察官の父親、看護婦の母、会社員の兄と短大生の姉。現病歴：母が働いていたため、乳

児期より昼間は近所に預けられていた。小3でS市に引っ越し、口うるさい母方祖父母と同居。中1の1学期から男子に苛められ、夏休みに感電自殺未遂、2学期から不登校となり、X年9/16当科を受診した。以後、ほぼ2週間に1回、約2年半、本人と30分、母と10分の治療面接を行った。Hは当初、無表情、無口であり、受診後1年間は殆どMSSMのみで交流した。MSSMに表されたテーマの変遷を見ると、エネルギーを入れる事と攻撃性を出す事が「食べる/食べられる」というテーマに、リビドーの表出欲求と強い超自我との葛藤が「自由/懲罰」のテーマに繰り返し見られ、否定的だった「自己像」が肯定的なものへと変化していった。また①MSSMのThの投影がHの投影と同質か異質か、②Th枠へのHの描き込みの有無、の2点に着目してCl-Th関係性を考察した。初期はThの応答がHの投影と異質であり、HはThの投影を無視して物語を作成し、Th枠への描き込みもなかった。4回目でThの応答がHの投影と同質になると、Th枠へのHの描き込みが見られ、全ての絵をH一人で完成したような作品となった。11回目でThが半ば異質なものを投影したところ「描き込みはないが、お互いの投影が呼応し合って全体が統一されている時期」が出現した。その後「Thの応答が異質でも構わず描き込む時期」があり、その期間中の17回目から豊かな言語表現が出現した。「ブタからもらい乳をしたアシカの物語」を作った22回目の後からTh枠への描き込みはなくなり、Thと分離独立し、26回目の元型的作品を最後に自由画へ移行した。高校に合格して治療室から卒業していった。考察：本例のような関係性が作りにくいCl-Thの組み合わせでも、MSSMは関係性形成の土台を提供し、言語的交流への橋渡しを担う。また治療関係が視覚的に捉えられ、意識化しやすい。本例では治療関係で生じる共生的融合から分離一個性化への過程をある程度、視覚的に捉えることができたと考えられる。

7) 学校で暴れる子供たち

—今年経験したADHDとその近縁疾患15例の検討—

稲月まどか	(黒川病院)
牧 正史・渡辺 啓子	
本田 陽子・大竹 恵子	
大久保昭子・神田 紀子	
松田 美加	(新発田児童相談所)
薄田 祥子	(中央児童相談所)

春先の注意欠陥/多動性障害(ADHD)のテレビ報道の影響が今年は各方面でADHDに関する関心が高まり、新発田児童相談所でも1998年11月までの10ヶ月に15例のADHDを経験した。15例のうち女子は1例のみで圧倒的に男子が多く、初診年齢は3才から14才とばらつきが見られたが、就学後に学校場面で問題行動が多発することを反映してか小学生の相談が11例と最も多かった。また相談の経緯も学校を通じてなされることが多く、就学前の幼児の問題行動や発達の偏りについて、家庭や保育所などの保育者から直接相談を受けることはなかった。発達歴を聞いてみると、全員に何らかの発達上の遅れや偏り、問題行動が散見された。殊に乳児期の人見知りの欠如、独歩後の多動が多く見られ、集団保育の場面では、集団行動が取れない、他児とケンカやトラブルが多い、癩癩をおこしやすいなど、ADHD特有の多動、注意障害、衝動性といった行動特徴に気づかれている例も多かった。学校場面ではこれらの問題行動がさらに深刻化し、自尊心や意欲の低下と相まって、被害的な言動や不登校、時には自殺をほのめかすなど二次的障害と思われる症状も見られた。さらに12才以上の症例では、ADHDに行為障害を合併しており、非行行為とも関連して対応に苦慮する例が多かった。症例の家族背景としてADHDに特有のものはなかったが、養育の殆どを母親や祖母が担い父親は子供の養育に参加しないでいて、子供が問題行動を起こすと母親をなじり、子供に暴力で対処しようとする傾向が比較的多く見られ、このような家庭にあっては子供の問題行動だけがクローズアップされ、子供の自尊心を育むような対応がなされていなかった。加えて学校でも子供が問題行動を多発する背景は家庭にあると単純に考えられたり、子供の良さと努力を個別に認めるといった対応に欠けた場合には、問題行動は深刻化し、二次的障害を伴うことも見られた。発達障害としてのADHDが、問題行動を多発したり、高じて行為障害を合併していく背景にはこうした家庭、学校双方の環境因子としての影響が大きいと考えられた。実際、治療場面では、家庭、学校双方に、子供の問題行動は発